

1. 研究者になろうとしたきっかけ

若い頃は、臨床で出会う子ども一人一人に向き合うことが精いっぱいの日でした。研究に費やす時間があったら、その時間で一人でも多くの子どもの困りごとをなんとかした方が子どものためになる、と考えて日々の診療に追われていました。どうして他の医療者は子どものニーズに気づけないのか、対応しようとならないのか、もっとたくさんの医療者が気にかけてくれたら、さらにたくさんの子どもの健康な成長ができるのに、と考え続けるうちに、客観的な研究成果によって医療者を説得できれば、子どもに寄り添ってくれる医療者が増え、子どもの健康な成長が支えられるだろう、と気づき、研究は子どもたちのために必要な研究がある、と考えるようになりました。

2. 助成研究の内容紹介

小児がんの治療成績の進歩は著しく、70～80%が治る時代になりました。治癒率向上の恩恵を与えてくれた大量の抗がん剤の投与を成長途上に受けた子どもたちが成人となった以降の身体・情緒・知的な健康の問題については、自己申告の調査で知られるのみで、統一された包括的な医学的スクリーニング検査は世界的にも行われておらず、その正確な実態は明らかではありません。

今回、健診センターを持つ総合病院の機能を活かした小児がん経験者の健診システムを構築し、その結果より長期フォローアップ体制と支援内容を検討します。

3. 2の将来に繋がる結果予想・目標

がん治療専門病院、小児病院では行えない包括的健診システムが構築されることにより、20代、30代の若年の小児がん経験者の治癒の質、生存の質を前向きに評価でき、本邦において、小児がん経験者のコホート調査による晩期合併症の実態がはじめて明らかになる。

そして、結果を本人に教育的にフィードバックすることで、小児がん経験者が自立的に将来の健康を維持・増進できるようになる。

#### 4. 全国の RFL 関係者に一言

研究助成と言う支援の形にいただいたものを、ぜひ当事者の方々に届くような研究成果とできるよう精進してまいります。小児がんの領域は小さな領域ですが、社会を担う意欲のある子どもたちの人生が、本研究成果により、彼らなりに生き生きとしたものになることで、社会にとっての大きな力になれるよう、役立てたいと考えております。